連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第 46 回
木の実いろいろ (4)
― クリの実とどんぐり ―

本吉 總男（もとよし ふさお）　2018 年 11 月

栗やどんぐり（団栗）のなる木はブナ科の植物です。ブナ科の代表種、ブナは近くても筑波山に登らなければ見られませんが、野生のクリ（シバグリ）やどんぐりのなる木、クヌギ、コナラ、シラカシ、アラカシ、椎の実のなるスダジイはみずき野町内でも見られ、地面にたくさん落ちているそれらの実を拾い集めるのは、この季節の楽しみでもあります。

今回は主としてみずき野町内に見られるこれらの木の実を紹介すると共に、みずき野周辺にはありませんが、ウバメカシとマテバシイについても述べてみたいと思います。

1　クリ

文化財公園には小さなクリの実が落ちています。横の径が 1.5 センチ前後。これは通常シバグリ（別名ヤマグリ）と呼ばれる野生のクリの実です、シバグリは北海道から九州までの日本列島と朝鮮半島中南部に広く分布しています。文化財公園のシバグリの実はとりわけ小さいのですが、大きさには変異があって、食べるのに適した大きさのものもあります。みずき野十字路交差点角の山富園の東斜面に沿う歩道にもシバグリが落ちているのを見かけますが、横の径が2センチほどあります。これなら、十分食べられます。

シバグリ　10月下旬　文化財公園
写真では分かりにくいが、
横径 1.5 センチ程

クリのいがは苞葉（花のつぼみを保護するための特殊な葉）が集まってできたもの（総苞という）で、クリの総苞は苞葉がくっつきあって分厚くなっています。棘はそれぞれの苞葉の下から突き出た枝が針状に変形したものです。クリのいがは、後述するどんぐりの殻斗（どんぐりを支えているカップ状のもの）に相当します。クリのいがも殻斗ということがあります。

クリの実は外側の硬い皮が果皮（桃やみかんなどの皮に相当する）で、その下の渋皮が種皮、つまり、渋皮から内部までが種子です。どんぐりの実も同様です。

クリの実はすでに主として東日本の各地の縄文時代（紀元前 1 万年前後から紀元前4世紀頃まで）の遺跡から出土し、縄文人にとってクリの実は主要な食料であったことが推定されます。特に青森市にある三内丸山遺跡（縄文前期～中期）の大規模な発掘から出土したクリ

の実は野生のクリの実より大きく、ここではすでにクリの木が栽培されていたと推定されています。

栽培の記録としては、日本書紀に、持統天皇が詔（みことのり）して、

「天下（あめのした）をして。桑（くは）・紵（からむし）・梨（なし）・栗（くり）・蕪（あおな）・菁（くさき）等の草木（すすき）を勧（うえ）め殖（ゑ）しむ」

とあります。

平安中期には、延喜式（えんぎしき）（醍醐天皇の命により編纂が開始され、967年に施行された法典）に、丹波に大粒で良質のクリの実が採れることが記されているそうです。丹波栗（丹波地方で生産される実の大きな栗の総称）という名は今でも使われています。

参考までに、栽培されているクリの花と実の写真を載せておきます。栽培グリの実がシバグリの実と比べるといかに立派なものかがよくわかります。なお、茨城県の栗の生産量は全国一だそうです。

栽培グリの雄花と雌花
6月中旬　取手市貝塚地区

栽培グリの実
10月中旬　取手市貝塚地区

なお、外国産のクリには、シナグリとヨーロッパグリ（セイヨウグリ）があります。これらのクリは日本のクリとは同属、すなわち近縁ですが、互いに別の種（しゅ）に分類されています（分類学では科の下が属、属の下が種（しゅ）です）。「甘栗」という名で販売されているものは、シナグリを炒ったものです。フランス菓子マロングラッセは、もともとヨーロッパグリを材料にしたものですが、日本のマロングラッセは、日本のクリの実が使われることが多いようです。

2　シラカシ、アラカシ、ウバメガシ

ブナ科のどんぐりのなる木には常緑樹と落葉樹がありますが、一般に、常緑樹の方をカシ（樫）、落葉樹の方をナラ（楢）と呼んでいます。

どんぐりが木についている間は、殻斗(かくと)に固着して、落下しないようになっています。殻斗(かくと)はクリのいがと同様、総苞(そうほう)を構成する苞葉(ほうよう)がくっつきあって分厚くなったカップ状のものです。どんぐりが成熟すると、多くは殻斗(かくと)から離れて落下しますが、殻斗(かくと)をつけたまま、落下しているものもあります。殻斗(かくと)もまた役目を終えて落下します。

シラカシは本州、四国、九州と中国に分布する常緑高木です。どんぐりのなる木では、みずき野町内にはシラカシが最も多く、遊歩道脇などに植樹されていますが、文化財公園やさくらの杜公園のシラカシはもともとこの地に生えていたものかもしれません。

アラカシは本州、四国、九州、沖縄の他、東アジアに広く分布する常緑高木です。暖地にはごく普通にある植物ですが、みずき野周辺ではシラカシと比べるとずっと少なく、町内ではさくらの杜公園でしか見ていません。

シラカシとアラカシのどんぐりは、とてもよく似ていて、実の形だけでは区別できません。両種とも、どんぐりは横太りの楕円形で、縦の長さは2センチほど。殻斗(かくと)には両種とも、輪状の模様があります。

シラカシとアラカシは、葉の形によって識別できます。シラカシの葉はアラカシの葉より細く、鋸歯(きょし)（葉のふちのぎざぎざ）は切れ込みが浅く、尖(とが)っていません。アラカシの葉は、葉の半ばから先端にかけて大きな鋸歯(きょし)が目立ちます。葉の長さはまちまちで、写真に示したシラカシの葉より長いものも多く、葉の長さで両種を識別することはできません。

シラカシ（左）とアラカシ（右）のどんぐり
10 月下旬　さくらの杜公園にて採取
どんぐりの形や殻斗(かくと)の模様では両種の識別は困難

シラカシ（左）とアラカシ（右）の葉
10 月下旬　さくらの杜公園にて採取
鋸歯(きょし)の違いで識別できる

ウバメガシは本州、四国、九州、沖縄、中国に分布する常緑中木または低木です。シラカシやアラカシとは少し縁遠いカシです。暖地に多い植物ですが、茨城県には少ないようです。みずき野周辺では見たことがありませんが、守谷市の立沢公園（たつざわこうえん）には植樹されています。殻斗（かくと）の模様はでこぼこした感じで、シラカシやアラカシとは異なっています。

ウバメガシのどんぐり
11 月上旬　守谷市立沢公園

ウバメガシの葉　11月上旬　立沢公園

ウバメガシは適地では垣根によく使われます。私は 10 年ほど岡山市に住んでいましたが、ウバメガシの垣根にどんぐりがなっていたのをよく思い出します。ウバメガシは備長炭（びんちょうたん）の材料としてもよく知られています。

3　コナラ

前述のように、どんぐりのなる常緑樹をカシ（樫）、落葉樹をナラ（楢）と呼んでいます。コナラはその代表的な樹種（じゅしゅ）で、他にミズナラがあります。ただし、落葉樹でどんぐりのなるクヌギやアベマキはナラとはいわないようです。

コナラは北海道、本州、四国、九州までの日本列島と中国、朝鮮半島に分布する落葉高木です。みずき野では、中央公園、文化財公園、さくらの杜公園と、第2調整池の北に隣接する郷州里山（ごうしゅうさとやま）で見ることができます。

コナラのどんぐり　11月上旬　文化財公園

コナラのどんぐりは、横太りの楕円形のものや長楕円形のもの、太いものや細いものなど、形に変異があります。また、殻斗(かくと)にはでこぼこの模様があります。葉は真ん中より少し上が幅広く、鋸歯(きょし)が目立ちます。

コナラの殻斗(かくと)　11月中旬　文化財公園

コナラの葉　10月下旬　中央公園にて採取

4　クヌギ

クヌギは本州、四国、九州の他、朝鮮半島、中国、インド、ネパール、インドシナ半島に広く分布する落葉高木です。みずき野では中央公園にあり、また郷州里山(ごうしゅうさとやま)にも見られます。

クヌギのどんぐりは球形に近い形で、直径は約2センチの大型のどんぐりです。殻斗(かくと)はたくさんの棘(とげ)状の突起で覆われています。前述のように、殻斗(かくと)とは総苞(そうほう)（苞葉(ほうよう)の集まったもの）の特殊な型で、クヌギの殻斗(かくと)を覆う棘(とげ)状の突起は、殻斗(かくと)（すなわち総苞(そうほう)）を構成する苞葉(ほうよう)です。

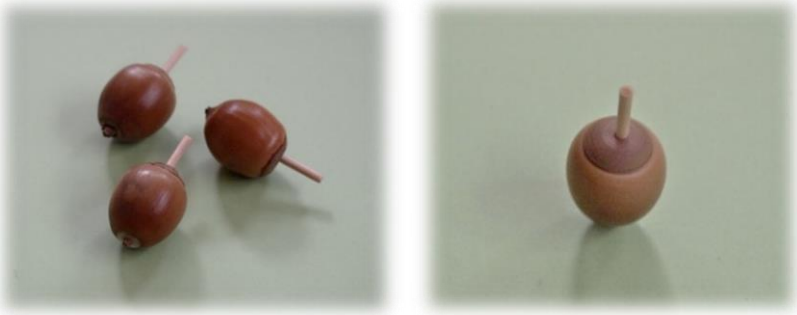
クヌギのどんぐりと殻斗(かくと)　9月下旬　郷州里山(ごうしゅうさとやま)

クヌギの葉
11月下旬　郷州里山(ごうしゅうさとやま)にて採取

棘(とげ)状の突起といってもクリの実の棘(とげ)とは違って、鋭くもなく、痛いものでもありません。でもこの突起で覆われていることによって、クヌギのどんぐりの殻斗(かくと)はシラカシやコナラのどんぐりの

殻斗(かくと)と比べると、ぶざまなものに見えるかもしれません。清少納言は『枕草子』で「恐ろしげなるもの」の中に「つるばみのかさ」を入れています。この場合「つるばみ」はクヌギのどんぐりのこと。「かさ」はたぶん殻斗(かくと)のこと。「つるばみ」はクヌギの古名ですが、どんぐりの煮汁で染めた衣（喪服）の色（薄墨色）の名称でもあります。

どんぐりの底に錐(きり)で孔(あな)をあけ、短く切った楊枝(ようじ)をさすと独楽(こま)になります。どんぐり独楽(ごま)はシラカシやコナラのどんぐりでも作れますが、クヌギのどんぐりは丸くて大きいので、作りやすく、よく回ります。子供たちもきっと喜びます。



クヌギのどんぐり独楽(ごま)

冬のクヌギ　1月中旬　郷州里山(ごうしゅうさとやま)
クヌギは真冬でも枯葉をいっぱいつけている

落葉樹の多くは冬になると枯葉を落として 裸(はだか) になってしまいますが、クヌギは真冬でも枯葉をあまり落とさず、身にまとっています。真冬の風物です。

クヌギにたいへんよく似たアベマキという落葉高木があります。若いクヌギの葉の裏には白い毛が密集して生えていますが、この毛は葉が成熟するにつれて抜け落ちます。一方、アベマキの成熟した葉の裏は毛が抜け落ちることなく、密集した毛が観察できます。またクヌギの幹にはコルク層があまりは発達しませんが、アベマキの幹には分厚いコルク層が発達しており、指で押すと、ゴムのような弾力性があります。これらの特徴によって、クヌギとアベマキを識別します。

さくらの杜公園には、「アベマキ」という名札のついた木があります。しかし、この木の葉の裏や幹のコルク層には、アベマキの特徴がはっきり出ていません。したがってこの木がアベマキであるかどうか、今後も観察をしていきたいと思います。

アベマキは西日本では普通の樹木ですが、関東には稀(まれ)とされています。1993～1997 年まで守谷で行われた植物の調査の報告の中にも、アベマキは入っていません（『もりやの自然誌』2000 年　守山町教育委員会）。

5　スダジイとマテバシイ

スダジイはシイ属、マテバシイはマテバシイ属に分類され、類縁はさほど近くありません。両種の実もどんぐりといって差し支えありませんが、他のどんぐりと異なり、両種とも渋味がありません。他のどんぐりは渋抜きをしないと食べられませんが、スダジイやマテバシイの実はクリの実と同様、そのまま調理して食べることができます。スダジイの実は通常炒って食べます。

通常椎(しい)の実といえば、スダジイやツブラジイの実を指します。スダジイは本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑高木で大木になるものがあります。ツブラジイもスダジイとよく似た樹種(じゅしゅ)ですが、実も形はスダジイの実より短いので区別できます。みずき野周辺にはスダジイはありますが、ツブラジイは見かけません。

スダジイの実の殻斗(かくと)は、身をすっぽり包むほどの大きさがあり、先端から3片に裂けています。落下した実と殻斗(かくと)の写真を載せておきます。

スダジイの実　10月下旬　文化財公園

スダジイの殻斗(かくと)　10月下旬　文化財公園

マテバシイは九州南部の原産の常緑高木で、九州南部以外の日本の各地域で見られるマテバシイは植えられたもののようです。みずき野周辺には見られないのですが、守谷市立沢(たつざわ)

公園(こうえん)には、マテバシイが植えられています。マテバシイの実は長楕円形で 1.5～2.5 センチあり、殻斗(かくと)はどんぐりに多く見られるカップ状で、表面はコナラの殻斗(かくと)に似てでこぼこしています。

マテバシイの実と殻斗(かくと)　11月中旬
守谷市立沢公園(たつざわこうえん)にて採取

スダジイ（左）とマテバシイ（右）の
実の大きさの比較
11月中旬　立沢公園(たつざわこうえん)にて採取

余話：どんぐりに寄せて

「団栗(どんぐり)の背競(せいくら)べ」という言葉があります。広辞苑には「どれもこれも似たようなもので。大したものではないこと。また、大きなちがいはないこと。」とあります。それでもコナラのどんぐりは他の団栗に比して、太ったもの、細いもの、長いものなど、多少の変異が見られます。

コナラは東北地方にも多い樹種ですから、宮沢賢治もコナラのどんぐりの多少の変異に注目していたのでしょうか。童話「どんぐりと山猫」には、山の奥に住む山猫が裁判長としてどんぐりたちの訴えに手を焼く場面があります。どんぐりたちの訴えは、「頭のとがっているのがいちばんえらい」「大きいのがいちばんえらい」「まるいのがいちばんえらい」「せいの高いのがいちばんえらい」などと主張し「だからわたしがいちばんえらい」といって互いに譲らないのです。こんな裁判が3日も続いていて、決着がつかないのです。山猫は、相談役として呼びよせた小学生の一郎に助けを求め、一郎はお説教で聞いた言葉を思い出し、「このなかでいちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなってゐないようなのがいちばんえらい」と申し渡すことを山猫にすすめます。山猫は一郎の助言をどんぐりに申し渡し、どんぐりたちはシーンと静まり返ってしまうのです。どんぐりたちの訴えの理不尽なこと、それを理解できず、威張るばかりで訴えを退けられない山猫裁判長の滑稽さ、そして、賢治の思想とも思える一郎の助言がたいへんおもしろく語られています。のちの「雨ニモマケズ」のおわりの部分「・・・ミンナニデクノボウトヨバレ　ホメラレモセズ　クニモサレズ　サウイフモノニ　ワタシハナリタイ」をも想起させる一郎の助言です。

どんぐりはユーモラスで可愛いく思う人は多いかもしれません。そんなところが賢治の童話や「どんぐりころころ」の童謡に表れているのかもしれません。

しかし、別の思いでどんぐりを見る詩人もいます。西脇順三郎の詩集「旅人かへらず」のはしがきは、第 28 回「紅葉(こうよう)・黄葉(こうよう)』の中でも引用しましたが、この詩集の意味するところを理解するために再度載せておきます。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（前略）自分の中にもう一人の人間が潜む。これは生命の神秘、宇宙永劫(えいごう)の神秘に属するものか、通常の理知や情念では解決の出来ない割り切れない人間がゐ(い)る。

これを自分は「幻影の人」と呼びまた永劫(えいごう)の旅人とも考へる。

この「幻影の人」は自分の或(あ)る瞬間に来てまた去って行く。この人間は「原始人」以前の人間の奇跡的に残ってゐ(い)る追憶であろう。永劫(えいごう)の世界により近い人間の思い出であろう。（中略）

路ばたに結ぶ草の実に無限な思ひ出の如(ごと)きものを感じさせるものは、自分の中にひそむこの「幻影の人」のしわざと思われる。（後略）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「旅人かへらず」には多数の野草や樹木が散りばめられています。どんぐりも現れます。

35　青いどんぐりの先が
　　少し銅色になりかけた
　　遣る瀬無い思ひに迷ふ

37　暮るるともなき日の
　　恋心
　　山里の坂
　　どんぐりの実の恋しき

56　楢の木の青いどんぐりの寂しさ

どんぐりも栗と同様、縄文遺跡から多量に見つかっています。縄文人はどんぐりをあく抜きして食べていたものと考えられます。先史時代の人々は、今よりもっとどんぐりに親しみを持っていたに違いありません。「幻影の人のしわざ」とは難解なことばですが、どんぐりを恋しく、また寂しく感じたりすることは、その時代の人々から受けついできた心の中にひそむ無形の遺産ではないかと解釈しています。